日本社会福祉学会　第６５回秋季大会

認知症グループホームの基盤となっている価値観の研究

ーM-GTA を用いた、玄関の施錠環境の設定プロセスの分析からー

○　立教大学　　氏名　林和秀（会員番号 009012）

キーワード３つ：認知症グループホーム　玄関の施錠　M-GTA

１．研　究　目　的

認知症グループホーム（以下、GH）の目的は、住み慣れた地域での生活の維持である。しかし、著者が GH の管理者として働く中で、生活圏域の異なる「住み慣れていない」環境での生活となる場合が多いことを経験した。実態から考えると、GH の実践は住み慣れた場所（＝自宅と生活圏域）での生活が壊れた認知症の人の生活を、新たな場（＝GH と地域社会）で紡ぎ直す試みであると言える。GH の実践には認知症の人の生きる姿をどう捉え、支援していくかという価値観が存在していると考えられ、新オレンジプランの「認知症の人を含めた高齢者にやさしい地域」づくりの際にも、重要な価値観となるだろう。しかし、その実践、例えば施錠や食事、地域との関わり方など入居者の生活に直接関わる運営的環境の設定は、各 GH で様々である。「生活の再構築」の在り方の違いには、認知症の人の生きる姿やその支援の在り方への価値観の違いが存在していると考えられる。

本研究の目的は２つあり、玄関の施錠環境の設定プロセスに焦点を当て、実際に行っている運営とその理由を分析することで、①それぞれの価値観とは何か、また価値観の違いとは何かを明らかにすること。そして、②GH が実践に込めてきた価値観を抽出すること、を目的とする。それは、今後の GH のあるべきケアの示唆になり、地域社会を「やさしい地域」にしていくために必要な価値観を抽出することにつながると考えられる。

２．研究の視点および方法

東京都認知症介護指導者でかつ GH の管理､運営する立場にあるものに全数調査を行った。承諾を得られた調査対象者（12 名／13 名）に対して、玄関の施錠環境の実際と理由について、半構造化インタビューを実施（20 時間 3 分：本研究では一部を利用）。調査期間は、平成 28 年 5 月～9 月。分析は根本にある価値観を抽出するために M-GTA を採用し、理論モデルを生成した。また、関心相関的アプロ―チに基づいて、少数の事例からも概念を生成している。本研究における価値観とは､【認知症状態にある人が生活する場として、何に善悪や好悪などの価値や大切さの度合いを認めるかという判断および判断する際に動因となっている根幹をなす物事の見方】と定義した。

３．倫理的配慮

立教大学倫理審査委員会に本調査の実施を申請、承諾を得、そのうえで対象者に倫理指針について文書で説明、同意と署名を得て行っている。

４．研 究 結 果

玄関の施錠の運営的環境は、①玄関を施錠しないことを原則とする（以下、施錠しない環境）、②玄関の施錠をすることを原則とする（以下、施錠する環境）、③施錠の有無にこだわらない（以下、施錠にこだわらない環境）、という３つに分類された。①が９名、②が１名、③が２名であった。施錠しない環境に影響を与えている根本的な価値観は、「人間本来自由」「人間は地域社会で生きる存在」「『外に出る』という意思表示は人の生きる力」という【人間観】であり、そのうえで【ケア観】と【影響に対する価値観】が存在する。施錠する環境も同様に【人間観】が根本にあるが、その内容は「『外に出る』という行為は居心地の悪さへの意思表示」であった。前者が認知症の人が外に出る行為を、「生きる力」という肯定的な力として捉えるのに対して、後者は「居心地の悪さへの意思表示」という、無くすべき行為として否定的に捉えることに比重が置かれている。また、【影響に対する価値観】にも違いが見られる。それは「施錠は大事故や興奮、混乱につながる」、施錠をしないことは「利用者の穏やかさ、意欲の向上につながる」とする価値観と、施錠による「入居者に及ぼす影響は無い」という価値観の違いである。さらに、施錠をしない環境において優先されるのは、「人間本来自由」という価値観に基づく、あくまで人間としての尊厳を守る環境にするために「『閉じ込めない』という尊厳の保持の原則」という施錠をしない状態にすることだが、施錠する環境においては「居心地を良くするケアが大切」であり、そのうえで「安全管理のために施錠は必要」とする価値観が存在している。また、施錠にこだわらない環境においては、根本となる価値観は【ケア観】となり、そこで重要視されるのは、「ニーズをとらえたケア提供がポイント」という価値観である。あくまで「キーワードとしての鍵」であり、施錠しない環境が大切にする、「閉じ込めない」ケアを重視しない。

５．考 察

認知症の人の生きる姿の捉え方は【人間観】に現れ、支援の在り方は GH の役割や認知症ケアで何を大切するかという【ケア観】から読み取ることができると考えられる。施錠しない環境の根本には、「人間本来自由」という【人間観】があり、そのうえで、「『閉じ込めない』という尊厳の保持の原則」と「有する能力に応じ、出られるように支援する原則」という２つの原則を重視する【ケア観】が存在する。GH が施錠の実践に込めてきた「人間本来自由」という価値観には、認知症状態にある人を「人間として観続ける」ことを強調する、積極的なまなざしが込められていると考えられる。そして、「有する能力に応じ、外に出ることを支援」し、「閉じ込めない」ということは、ケアする側が認知症状態にある人に対してどのような生活の場を保障するかの問題であり、日本国民としての当たり前の生活環境を保障しようとする能動的な営みであるといえる。「人間本来自由」という人間観に基づき「人間として観続ける」姿勢を共有する中で、具体的事例の検討を地域で積み重ねることは、認知症状態にある人にとって「やさしい」地域づくりに資すると考える。